

臨也から『今夜デートしようよ』とメールが来たのはセルティたちに説得された翌日のことだった。

用事もないので了解の旨を返信し、授業が終わり放課後になるなり、待ち合わせ場所へと向かう。

今日も池袋は人が多い。土日になるとますます多いが、平日でも田舎出身の帝人からすれば十分多い。昨日のことがあったので何となく周囲を見回しつつ歩いたが、セルティの姿も静雄の姿も見つからなかった。そんな偶然はそうそうあるわけもないか、と苦笑する。

昨日は長時間の説得後、セルティの手作り夕飯までごちそうになって、挙げ句に静雄にアパートまで送ってもらった。どちらも一応断ったが、夕食は是非、とセルティに言われ、新羅もせっかくセルティがはりきっているんだから、と勧めてくれたので結局領いた。アパートまで送る、という静雄には女の子じゃないから大丈夫、と再三伝えたが、臨也の恋人ならば逆恨み対象になるかもしれない、深夜は危険だ、という話になり、やはり結局領くこととなった。

そうして繰り返されるのは、なるべく急いで『恋人ごっこ』のバイトはやめるように、という忠告だった。辟易とするほどに言われたが、これはもう当然と受け止めるしかない。

自分だってたとえば杏里が臨也と恋人ごっここのバイトをするにしたら、などと言ひ出したら必死で止める。

それがどんなに安全で短期であつたとしてもだ。セルティたちもそれに似た心情なのだろうとわかっているから、曖昧に笑って流すしかなかった。

(でもなんか、新羅さんは意味深なこと言ってたな)

あれは何だったのだろう。そんなことをぼんやりと考えている間に、待ち合わせ場所が見えてきた。

待ち合わせ場所はハンズ前。きよろ、と見回すと、すぐに臨也を発見した。けれど、彼は一人ではなく、彼を取り巻くようにして女性が二人臨也に話しかけている。

どちらも二十歳前後の、綺麗な人だった。大人びた化粧をし、冬なのにすらりとした足が栄えるミニスカート。表情はうつとりとしていて、臨也を見つめている。

臨也の信者だろうか、とその様子を見て思う。信者ではなく、単純に恋しているのかもしれない。

どちらにしろ、二人とも臨也しか見えていない状態だと見て取れた。

臨也は、と言えば、いかにも作りものめいた微笑を浮かべて、彼女たちと何かを話している。耳に心地良い、甘い言葉を紡いでいるのかもしれない。いつものように。

そんな臨也を、誰かと待ち合わせしている様子の女子高生も見つめている。見とれている、という方が正しいかもしれない。

(確かに、格好いいよね)

つくづく思う。彼ほど眉目秀麗という言葉が似合う人間も珍しい。